

# 「卑弥呼」

## 伴 とし子

はじめに

卑弥呼は、古代史の女性を代表する謎に包まれた女王。邪馬台国論争は、いつまでたっても九州説、畿内説を東西の雄として百家百様の論があるが、いまだ決着にはいたらない。

私は、以前より考古学的遺物と伝承、伝説と丹後一宮の籠神社に伝わる国宝『海部氏系図』の研究から、「邪馬台国 丹後・丹波説（大丹波王国説）」を提唱してきた。「邪馬台国タニハ説」といえる。

日本建国の始まりの地は、丹後。タニハである。そこが倭国の中心といえるところで、卑弥呼がいたと考える。

『魏志』倭人伝の記述での注目は、その道程を不弥国までは距離で示しながら、その後は日数で表していることだ。

また、投馬国から邪馬台国への道程の「水行十日 陸行一月」の読み方にある。これを「水行十日もしくは陸行一月」と読めば、船で海を渡っても、陸路をいっても丹後半島にたどり着く。

卑弥呼は、日の巫女。日の巫女は、それぞれの部族にいたであろう。しかし、『魏志』倭人伝に記された卑弥呼というのは、そうした部族のなかでも、当時の倭国を動かした最強の部族の中にいた日の巫女であったと考える。古代における最強の部族とは海人族である。そうして、その卑弥呼は、丹後一宮籠神社所蔵の『海部氏勘注系図』の中に認められ、台与もまた同系図にいたと考察する。そして、卑弥呼の母は近江にいたと記したのが本稿である。

### 卑弥呼

#### 1 日の巫女を考えるまえに 「女」とは

漢字学の世界に偉大な金字塔を打ち立てられた白川静氏は、漢字を古代の祭祀や、精神文化から解釈された。「女」という漢字は、「腕を胸の前において、膝をまげてひざまずいているところ」を表した象形文字であるという。古代における女性の役割として、神様を祀る仕事があった。女性は、「神」に対してひざまずくのだと知った。

古代において、神を祀るといふ重大な役目を果たしていたのが女性である。古代女性が神の意志を聞く存在であった。卑弥呼は神の意志を聞くことができ、日の巫女であった。

#### 2 神を祀る重要な役割をした日の巫女 Ⅱ 卑弥呼

西晋の陳寿（二三三年～二九七年）のえらんだ『三国史』のひとつである『魏

志』東夷伝、倭人の条には、三世紀の倭国の状態を記し、そこには倭国を治めた偉大な女性がいたことを告げる。

古代の倭国には、はじめは男子をもって王としていたが、倭国は乱れ、争いが絶えなかったので、そこで、共に一女子を立てて王とした。それが卑弥呼であった。魏志では「名付けて卑弥呼という」とあるが、国の争いをおさめられるほどの、しかも各国が共に立てた女性であって、まさに、倭国を代表する輝く「日」の巫女であったと考える。古代、各部族の長のそばには必ず神の神託をつげる巫女が居たと考えられる。そうした部族のなかでも、最も強力な部族にいた巫女こそが、倭国を代表する日の巫女であろう。古代の最強の部族とは海人族である。そこにいた巫女こそが、大巫女であり、日の巫女、『魏志』東夷伝、倭人の条に記された卑弥呼と考える。

その卑弥呼は、「鬼道につかえ、よく衆を惑わす」とある。人々を惑わすとは、他国からみても不気味であり、脅威であり、卑弥呼の実力を示したものと思える。

また、卑弥呼は、年は「すでに長大」で「夫婿なく」、「男弟が佐けて国を治めている」という。また、「王となつてから、見たものは少なく」「婢千人をみずからに侍らせている」とし、「男子が一人あつて飲食を給し、辞を伝え居処に入りしている」また、「宮室、楼観、城柵を厳かに設け、常に人があつて、兵を持って守衛している」という女王様ぶりである。そして、「親魏倭王」の称号をいただき、たくさん絳地（あつぎぬ）や、交竜錦などの織物などをいただいた。また、特に、紺地句文錦（紺色の地に句ぎりもよりのついた錦の織物）三匹や、白絹五十匹など、また、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹おのおの五十斤を賜うとある。そして、みな装封して難升米・牛利にわたすから、還りに到着したら受け取って、あなたの国中の人に、国家（魏）があなたをいとしく思っていることを知らせよ、というのである。

その後、卑弥呼が死に、男王をたてたが、国中が不服で、お互いに誅殺しあい、当時千余人を殺しあつたので、また卑弥呼の宗女壹与（『北史』等に台与とあり、筆者はトヨと考える）という年十三のものをたてて王とし、国中が平定したとある。

卑弥呼とは誰なのか。まず邪馬台国について考える必要がある。

### 3 邪馬台国とは

邪馬台国は、中国の歴史書『三国志』の中の『魏書』第三十卷『烏丸鮮卑東夷伝倭人条』を略称して『魏志』倭人伝と言われている記述の中で、当時日本列島にいたと思われる民族・住民の倭人の習俗や地理などについて書かれたなかに出てくる。

『魏志』倭人伝は、中国で編まれた歴史書で、二三年から二九七年に生きた晋の陳寿が書いたものである。しかし、これには元になったとされる書物があり、大半を『魏略』によつたものであるとされている。この『魏略』を書いたのが、魚拳（ぎよけん）という人物で、生没年不詳であるが、ほぼ、陳寿と同時

代に生き、陳寿より数年ないし十数年前に没したということだ。また、『魏略』の原本は、滅びて伝わらず、逸文によって知られる。

その中の記述から推定すれば、もとは百余国あったといい、今、使訳通じるところが三〇国とある。その国は、もと男子をもって王としていたが、二世紀後半に騒乱が起き、卑弥呼と言う女子を共立することによってようやく混乱が治まったという。

二四八年頃、同じ倭人の国狗奴国（くなく）との戦いの後に、卑弥呼が死去し、男王が後継に立てられたが混乱を抑えることができずに、「臺與（とよ）」が女王になることで治まったという。これが「邪馬台国」と「卑弥呼」「臺與（とよ）」の概略である。

ところが、日本列島にあったとされる邪馬台国や卑弥呼について、日本の記録資料が存在しない。『日本書紀』の巻第九の神功皇后の記述に『魏志』倭人伝の引用があるだけである。『古事記』と『日本書紀』からは究明できない邪馬台国と卑弥呼について、他の資料から推測するとしたら、遺跡や出土品などの物的資料や伝説や神話、そして国宝『海部氏系図』ではないだろうか。

### （1）邪馬台国を探す

『魏志』倭人伝に書かれた国々の実際の場所を考えてみよう。

『魏志』倭人伝に書かれた国々のなかで、対馬国から不弥国までは、ほぼ九州のなかで異論はないようであるが、邪馬台国と、投馬国についてはさまざまな意見がある。

戸数から見ると、邪馬台国は、七万余戸とあり一番多く、女王卑弥呼が存在して、倭国の中でもっとも強力な国であったことがわかる。

次が、投馬国で、五万余戸である。次が、奴国の二万余戸である。所在地でいえば、対馬国から不弥国までは、北九州のなかにあり、それらを全部あわせると、ちょうど三万余戸となる。

### （2）方角と里数

帯方郡から邪馬台国は12,000余里。

邪馬台国大和説の論者にとつての弱点としてあげられるのは方角である。「東」ならわかるが、「南」では大和の方角ではないというものだ。しかし、明の建文四年（一四〇二）に朝鮮で作成された『混一疆理歴代国都之図（こんいつきようれきだいくくとのみづ）』には、日本列島が南北に長く描かれている。それによれば、南の方角で良いという。

また、九州説の論者にとつては距離が難点となる。邪馬台国にいくのに、「水行十日陸行一月」とあり、「一月」もかかっていたら、九州を飛び出してしまいうから、ここは、「二日」の間違いではないかという。しかし、それに首肯するには難しいといえよう。

### （3）里数から日数になっているのは何故か

さて、注目するのは、邪馬台国にいたるまでの距離の表記の仕方である。

不思議なことに、『魏志』倭人伝には、韓国の帯方郡から狗邪韓国、対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国、不弥国、投馬国、そして、邪馬台国に到るうち、不弥国までは統一して「里数」で表しているのに対し、投馬国までと邪馬台国までは、「里数」で書かず、「日数」による表記をしている。

これは何故だろうか。投馬国までと邪馬台国までの里数が書かれていないこと、ここに、『魏志』倭人伝の曖昧さがあるが、里数が記せないということとは、記せない理由があったのだろう。

その理由のひとつとして考えられるのは、投馬国と邪馬台国以外は、ほぼ九州内に比定できるが、この二つの国に行くには、九州から海を渡らねばならなく、遠くにあつたからだと考ええる。

もうひとつ考えられることは、投馬国も邪馬台国も人口が多い。ということ、その国の範囲が広く、はっきりと里数を書くことが困難であつたのではないかと考えられる。つまり、水行や陸行で何日かかるといふように、日数で表したほうが実情にあつてしていると判断されたのではないだろうか。

また、伊都国は、「郡使の往来常に駐（とど）まる所なり」とあるように、使いは、伊都国まできて、それ以降は、行かなかつたから具体的な里数が書けなかつたとも考えられる。

塚口義信氏は、「夷人（いじん）里数を知らず。ただ計るに日をもつてすと伝える『隋書』の記事である。里数を知らない倭人は、行程で日数を計っているというのである。とすると、投馬国と邪馬台国までの行程についてのみ日数で記されている倭人伝の記事は、倭人から聞いた伝聞史料に依拠している蓋然性が高い」（P72「邪馬台国と倭女王卑弥呼」と書かれている。

あるいは、行つてはいるが、使者の報告どおりには、編集されなかつたのではないか、などいろいろに考えられる。

卑弥呼は、大きな倭国の女王である。

その倭国の女王たる卑弥呼が、魏の国に朝貢してくるのである。魏国からすれば、少しでも遠いところから朝貢に来るものがあるといふことのほうが、魏の力を大きく見せることにもなる。なおさらはつきりと書かず、遠方であるといふことが伝わればよかつたのではないだろうか。

文献を読み解くには、記述されたことを重んじるのが当たり前であるが、一部に曖昧な記述があるとしたら、それも、考慮にいれるべきである。

「郡より女王国に到る萬二千余里」という表現がある。塚口義信氏によれば、「萬二千余里」という表現は、ほかの中国史書にもよくある表記の仕方、邪馬台国がたいへん遠いところにあるという観念からでた里数であるとして、あまりあてにならないとしている。邪馬台国がはるか遠くにあるということを示した観念的な表現であると考えられる。

したがって、『魏志』倭人伝に出てくる里数や方角はともに信じられないのであつて、この点を念頭に置いて考察しなければならないということである」（「講座・邪馬台国と倭女王卑弥呼」塚口義信）と書かれている。

文字資料を軽微に扱っていいとは思ってはいない。資料は、やはり重要であることはいまでもないことであるが、考古学的な資料と合わせていくことが大事であると考ええる。

#### (4) 日本海ルートできた魏使

投馬国と邪馬台国の二国については、いずれも、「水行」でたどりつくことができる国であると述べている。

それでは、魏使は、いったいどのコースをきたのであろうか。

今までの邪馬台国研究者のなかで、笠井新也氏は、投馬国を出雲、邪馬台国を大和とし、敦賀に上陸して、陸行一月で大和に到着したという論を展開した。

また、山田孝雄氏は、同じく日本海ルートとし、但馬を投馬国とし、大和を邪馬台国とした。また、さまざまな論者により投馬国の場所については、①出雲、②但馬、③広島、④山口などある。

小路田泰直氏は、北條芳隆氏が魏の年号のはいつた紀年銘鏡から、魏使の邪馬台国に至る経路が、日本海経由であったことを明らかにされ、小路田氏も魏使が日本海ルートで来たとしている。『邪馬台国と「鉄の道」 P90』小路田氏は、魏の使いは、日本海側を通り、丹後もしくは若狭から大和へ陸路向かったとしている。また、投馬国を出雲としており、「投馬国から水行十日で到達するのは丹後半島の付け根付近（多分、天橋立付近）。ならばそこから大和まで行くのに一月かかって、何もおかしくはない。後は方向の問題が残るが、丹後から大和までは基本的に南行であるから、その問題も半分は解消する」と書かれている。

日本海ルートを船で水行してきた魏使にとって、投馬国の最初の港が出雲であった可能性はある。また、次に水行して辿り着いたのが、邪馬台国の港である丹後地域であったのではないか。

#### (5) 「水行十日陸行一月」の解釈について

魏使がたどったのは、日本海コースで、海を渡って投馬国につく。そこから、「水行十日陸行一月」で邪馬台国につくという。船による水路と、陸路をいくのだが、この「水行十日陸行一月」はどう解釈したらいいのだろうか。

「水行十日陸行一月」は、ふたとおりの解釈ができる。

A・「水行十日」そして「陸行一月」

B・「水行十日」もしくは「陸行一月」である。

投馬国の位置にはいろいろな意見があると思うが、例えば出雲としたら、

A の場合は、「水行十日」して、さらに「陸行一月」することになる。

A の読みかたをした場合は、「水行十日」で、邪馬台国の港丹後半島に上陸し、それから「陸行一月」でヤマトに到着すると考えられる。丹後海人族は丹後で建国し、さらにそのうちの一族が、古代にヤマトに入っていることを考える

と、邪馬台国も丹後、丹波を中心に広くヤマトまで勢力が及んでいたと考えられる。

Bのように解釈すると、邪馬台国は、投馬国から「水行」でもいけるし、もしくは「陸行」でも行ける場所にあるということになる。投馬国について出雲を中心とした広い範囲を想定しているが、出雲を起点として、船による「水行」でも、「陸行」でもたどりつけるところは丹後半島である。

AとB、どちらの読み方としても、丹後半島ははずせないということだ。

この丹後地域の邪馬台国時代について、次のように書かれている。『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』のなかで、石崎善久氏が、赤坂今井墳丘墓（京丹后市峰山町）のなかに、乳幼児の墓があり、そのなかにも鉄製品が埋葬されていたことを述べられ、「こういう乳幼児ですら、鉄製品を副葬されることが、この墓が有力な人の墓であることのひとつの左証」と書かれている。また、同書で、杉原和雄氏は、「日本海側では群を抜き、丹後が一つの大きな政治勢力の拠点であることは確か」と書かれ、「日本海側の有力者たちは海人集団を形成し、海を介して鉄素材や素環大刀あるいは鏡を入手した。」「弥生後期には北部九州や朝鮮半島と盛んに交流し、ガラスや鉄、鏡を手に入れた。」とあり、丹後半島が極めて、有力な国として存在していたことを述べている。

邪馬台国とは、弥生時代に倭国の中でも強力な国で、卑弥呼がいた女王国である。弥生時代に直接海外と交易をしていた強力な国こそ邪馬台国で、倭国のリーダーになることができた邪馬台国。九州地域や朝鮮半島とも独自に交易していた丹後を中心とする大丹波王国（＝丹後王国）は、まさに、最有力国であり、邪馬台国だった可能性が大きいと考える。

#### （6）邪馬台国時代の鉄器出土数

さて、邪馬台国時代の鉄器出土数について、石野博信氏は、丹後・丹波・但馬の「北近畿」地域が百だとしたら、大和・河内・山城などの「近畿中枢部」は、十〜二十にすぎないと、その差が著しいことを発表されている。これほどの違いがあるかと大いに注目する。

もしも、卑弥呼の時代に、丹後勢力と近畿中枢部が戦ったとしたら、どうなるであろうか。武器となる鉄器の多さでいえば、おそらく、邪馬台国時代の最有力国は、大丹波王国＝丹後王国であったと考えられる。

古墳の発掘からも丹後の古代には、女王がいたと思われる古墳が出土しており、邪馬台国＝女王国であり、女王国＝丹後であれば、邪馬台国＝丹後という図式が浮かぶ。

弥生後期の有力国は、女王卑弥呼を擁立した邪馬台国である。九州地域や朝鮮半島とも独自に交易していた丹後を中心とする大丹波王国（＝丹後王国）は、まさに、最有力国であり、邪馬台国だった可能性が大きいと考える。

#### （8）邪馬台国の条件

邪馬台国はどこだろうかと、『魏志』倭人伝や『海部氏系図』や、『古事記』『日本書紀』を紐解き、また、遺跡や伝承などから考えていくと、丹後地域というところが、有力な候補地のひとつとして浮き上がってきた。こうしたことから、卑弥呼のいた邪馬台国の場所を特定していくための条件として、次の四つを上げてみた。

① 邪馬台国の条件Ⅰ 海を制することができたのはどこか。

『魏志』倭人伝には、倭国の風俗が書かれているが、海にかかわる暮らしをしていくことがわかる。

倭の女王卑弥呼は、中国の天子のところに大夫である難升米や次使である都市牛利を遣わしているが、彼らは海を渡っていかなければならない。広大な海を渡るためには、まず、航海を可能にする大きな船を造る技術を持ち、その船を作る技術者を束ねる力もあり、航海術にも長けていただろう。また、航海には、天文にも秀でている必要がある。他国との交流に必要な語学力もあり、製塩、養蚕、農耕、織物などにも秀で、そして戦いとなれば、強力な水軍となったであろう。

こうした能力を持った氏族とは古代海人族である。国宝『海部氏系図』からは、強力な水軍であった丹後海人族が浮かび上がる。邪馬台国の第一の条件、海を制するものとは海人族であり、その海人族の本貫は丹後半島にある。

② 邪馬台国の条件Ⅱ 鉄を制したのはどこか。

弥生後期の時代、最も国際性豊かで、大きな力を有した海人族こそ、当時の大王ではなかっただろうか。それは、何によって勢力を強めることができたかといえ、それは鉄でないだろうか。その鉄を制したものが当時一番力をもったと考える。

『古事記』には、「大縣主」という表現が二箇所ほどでてくるが、そのひとつは、開化天皇の時代の「旦波の大縣主 由碁理」である。この「由碁理」とは、「湯凝り」で、製鉄に関係した人物、鍛冶王と考えられる。

弥生後期に鉄が多く出土するのは、九州である。しかし、ひとつの王墓から、十一本の鉄剣が出てきたのは丹後の大風呂墳墓（与謝野町）である。このことから、鉄を制し、一番強力な大王がいたところが丹後地域だということがいえる。

③ 邪馬台国の条件Ⅲ 弥生後期に、文化が一番進んでいたのはどこか。

赤坂今井墳丘墓、大風呂南墳墓などからの出土物にみるように、弥生時代の丹後の考古学的資料をみると、丹後の弥生の王墓からでてくるおびたしいガラス、玉類などは、当時の大和の墳墓にはないものである。貿易立国として、当時一番栄えていたのが丹後地域と考えられる。

④ 邪馬台国の条件Ⅳ 巫女王のいた女王国とはどこか。

女性が単独で葬られている古墳は、全国でもわずかしかないが、古墳時代前期末から中期前葉にかけての遺跡である大谷古墳（京丹後市大宮町）は、熟年の女性がただ一人葬られていたことから、女王の墓であろうといわれる。また、赤坂今井墳丘墓（京丹後市峰山町）の二番目に大きな墓は女性墓であろう。古代において、丹後地域には女性の有力者がいたことが遺跡からも証明されている。

また、国宝『海部氏勘注系図』の中に、「日女命」の名前がある。系図の中でくる女性名というものは、祭祀にかかわるような重要な存在であった女性が書きとどめられたと考えられる。丹後の地理や考古学的な状況と、国宝『海部氏系図』『海部氏勘注系図』の分析から、その中に記された一人の「日女命」が卑弥呼とトヨであると考えられる。卑弥呼が丹後で生まれ育ち、またその本家筋にあたる宗女トヨも『海部氏勘注系図』にいと考えると考えた。

こうしたことから、丹後地域に巫女王の伝統があること、女王国であったと考えられるのである。このように邪馬台国の四つの条件の妥当性が高いのは丹後地域であると考えられる。

① 海を制することができたのは、強力な海人族、水軍のいた丹後である。  
② 弥生後期、一つの墓に一番多くの鉄剣を埋葬していたのが丹後で、王の力が強力であり、鉄を制していたのは丹後である。

③ 弥生後期に、文化が一番進んでいたと考えられるのは、丹後の弥生の王墓からでてくるおびただしいガラス、玉類が証明する。これらは、当時の大和にはないものであり、貿易立国として、当時一番栄えていたのが丹後と考えられる。

④ 邪馬台国は女王国である。巫女王の系譜をたどれる丹後である。

また、邪馬台国は、水行していける場所であり、日本海ルートを通り、魏使がきたなら、その邪馬台国の港は、丹後が一番適切であるといえる。前述したように、卑弥呼の時代にひとつの墓に鉄剣を大量に埋葬できるほどの実力のある王がいたのは丹後である。

こうしたことから、卑弥呼の時代は、丹後の国力は最高であり、魏の使いは、日本海ルートを通り、丹後を邪馬台国とみなしていたと考えられる。そして、少なくとも邪馬台国の港であると解していたと考えられる。

大きな倭国の中の女王国である邪馬台国は、丹後地域を中心とする大丹波王国にあったと考える。

さらに、邪馬台国への道のりを、「水行十日陸行一月」と表現されていたことに注目する。「水行十日」もしくは、「陸行一月」と読めば、丹後半島に上陸で、邪馬台国は丹後となる。

また、「水行十日」さらに「陸行一月」と解釈すると、丹後半島に上陸して、さらに陸行してヤマトに向かったと考ええると、邪馬台国はヤマトとなる。

しかし、こう解釈した場合でも、古代のヤマトは、丹後海人族が進出しているため、大丹波王国の勢力の及ぼす範囲となる。

丹後海人族は丹後でまず建国し、さらにそのうちの一派が、その次に古代にヤマトに入って建国していると考え、大丹波王国の拠点は、丹後にあるが、そ



の大丹波の勢力は広くヤマトにまで及ぼしていると考えられる。それは、すなわち、邪馬台国が丹後地域を中心にあり、その及ぼす勢力がヤマト方面まで広がっていたということである。

また、次の大和政権がヤマトに築かれていく過程を考えると、初期の邪馬台国の中心は丹後地域にあり、その後、勢力の中心はヤマトに遷り、それが次の大和朝廷に連続していったと考えられる。

倭国の女王となった偉大なる女性卑弥呼のふるさととは丹後である。海部氏系図にそれは生きている。

▼邪馬台国への道筋の地図（表3）

## 2、卑弥呼はどこに？『魏志』倭人伝の卑弥呼と『海部氏系図』の日女命

### (1) 『魏志』倭人伝の記す卑弥呼

『魏志』倭人伝によれば、三世紀、外交が上手で、鬼道で人心を掌握した女王により国が治められていたことがわかる。当時は、呪術社会であった。一番重要な要素は、王のそばに神託を告げる巫女がいたことである。海人族のなかにも、必ず王のそばには神託を授ける巫女がいたであろう。そして、巫女のなかでも一番優れた力をもった巫女の中の巫女王がいたと考えられる。そして、その力を頼る諸国の王たちが結束して女王として共立したのが卑弥呼であろう。倭国の大乱を鎮めるためには、卑弥呼が共立されたが、それは卑弥呼の巫女としての能力が優れていたということであっただろうが、卑弥呼を擁立した氏族の力が強力であったことを忘れてはならない。

(資料 4)

### (2) 卑弥呼の活躍した時代

卑弥呼の活躍した時代というのは、二世紀後半から三世紀前半である。

卑弥呼は、倭国大乱後、女王として共立されている。倭国大乱は、『梁書』などが、「靈帝光和中・・・」と記したところから判断すると、靈帝光和中とは、一七八年〜一八三年である。この頃に、卑弥呼が何歳で共立されたかはわからないが、女王となったのである。

トヨが一三歳で女王となったというので、仮に、卑弥呼も同年代で女王となつたと仮定してみよう。そうすると、「一八三年、卑弥呼十三歳」となる。これを基準にすると、卑弥呼は、百七十年ころに生まれたことになる。

次に、卑弥呼が没したのはいつか。狗奴国と激しい戦いをしたのが二四七年で、その翌年の二四八年ではないだろうか。その後、トヨが十三歳で女王となる。このように、考えると、卑弥呼が生きた時代は、一七〇年から二四八年となる。あくまでも推定であるが、およそ七十八歳まで生きたと考えられる。ちなみに、二三九年親魏倭王の金印を賜ったのは卑弥呼六十九歳の時となる。『魏志倭人伝』に卑弥呼が、「既に年長大であった」と言うくだりと符合する。

こうして卑弥呼の生きた時代を想定すると、卑弥呼が生きた一七〇年頃から二四八年までの時期は、弥生後期の時代になる。このころの遺跡を広く比較検討してみると、二世紀末から三世紀初めのころの丹後の発掘成果は他の地域を押さえて最も繁栄していたといえる。

### (3) 卑弥呼の後継者 宗女トヨ

倭国は、もとは男王がおさめていたが、倭国大乱後、女王として長く君臨した卑弥呼であった。卑弥呼の死後は、さらに男王を立てたが、戦乱がつづき、そこで、卑弥呼の宗女トヨが王となった。

トヨは、『魏志』倭人伝に、「卑弥呼の宗女壹與」と書かれた人物である。「壹與」となっているので、「イヨ」と読む説がある。しかし、『梁書』や『北史』には「臺與」と記されている。「臺」を「ト」と読み、「臺(台)與」は「トヨ」と読む説をとる。

『魏志』倭人伝には、トヨは、

① 卑弥呼の宗女であること。

② 卑弥呼が死んだのが、二四八年頃(推定)で、その後、男王が立ったが治まらなかったもので、十三歳のトヨが女王になって治まった。

ということが書かれている。

宗女とは、「同宗の女。王女」(『大漢和辞典』)とある。「宗族」を「父の一族」または「一族」とある。「宗子」は「本家を嗣ぐ子、嫡長子、同族の子」をいう。

宗女とは、祭祀を継承した本家筋に当たる女性を言うのであろう。ということとは、卑弥呼とトヨは同じ一族であることは間違いない。卑弥呼が誰かがわかれば、その一門にトヨがいる。トヨが誰かとわかれば、その一族に卑弥呼はいるのだ。

卑弥呼没後、トヨが女王になった。女王トヨの誕生は二四九年と推定する。

また、トヨの年齢は、『魏志』倭人伝の記録を参考に、卑弥呼の死(二四八年)の翌年二四九年に十三歳で女王になったと仮定すると、次のようになる。

(『魏志』倭人伝をもとに推定)

二二七年

(トヨ 一歳)

二二九年 卑弥呼、親魏倭王の金印授かる。

(トヨ 三歳)

二四七年 倭の女王卑弥呼は狗奴国の男王卑弥弓呼と交戦。

(トヨ 十一歳)

二四八年 卑弥呼死す。男王立つも治まらず。

(トヨ 十二歳)

二四九年 トヨ 十三歳で女王。

(トヨ 十三歳)

二六六年 倭の女王、西晋に遣い貢ぐ。

(トヨ 三十歳)

卑弥呼の同族で祭祀を引き継いだトヨという女性は、倭の女王として君臨した。しかし、トヨが何歳まで生きたかは不明である。

『魏志』倭人伝には、卑弥呼のあとをついだ宗女壹與が、「生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大勾珠二枚、異文雜錦二十匹を貢す」とある。ここでいう「白珠」とは、真珠という説があるが、丹後で加工している水晶だったのではないかと想像する。

#### (4) 卑弥呼とトヨがいた海部氏の系図

「卑弥呼」とは、「ひみこ」と呼ばれる人がいるという耳から聞いた情報である音に、当て字をいれたものであろう。しかも、「卑」という字は、「卑しい」という字であり、ここには、「いやしい」「おとる」の意味が含まれており、好感のもてる字とはいえない。

本来は、「ひ・み・こ」であり、「ひ」は、「日」であり、「みこ」は、「巫女」或いは「御子」「神子」であろう。日の巫女、日の御子、日の神子、いずれにしても固有名詞ではなく、普通名詞と考えられる。まさに、神の託宣を述べ、倭国全体を平和に導くための巫女としての高い能力を秘めた、輝く「日」の巫女であったにちがいない。

さて、海部氏の『海部氏勘注系図』のなかに「日女命」という人物が登場する。「九世孫妹、日女命」と「十一世孫妹、日女命」である。

『海部氏勘注系図』の九世孫に「意富那比命（おほなびのみこと）」とあり、妹として、「日女命」とある。そこに、亦の名「倭迹々日百襲姫命」「一云う、千々速日女命」「一云う、日神」「亦名、神大市姫命」とある。

また、もう一人は、十一世孫小登與命の妹として「日女命」と記されている。そこには、亦の名「稚日女命（わかひるめのみこと）」とあり、さらに、「亦の名小豊姫命」とある。ほかに、「亦名 豊秋津姫命」「亦名 宮簀姫命」「亦名 日神荒魂命」「一云、玉依姫命」とある。また、「一云、向津姫」とある。「向津姫」とは撞賢木巖之御魂天疎向津姫（つきさかきいつのみたまあまさかるむかつひめ）で、瀬織津姫（せおりつひめ）である。

亦の名がたくさんあるから混乱しそうだが、「日女命」という普通名詞では、いったい誰のことなのかわからない。それを示しているのが、この「亦の名」「一云」の表記なのだ。

十一世孫の妹「日女命」の別名にある「稚日女命（わかひるめのみこと）」は、『日本書紀』で、アマテラスの別名を「稚日女命」として出てくる。また、「小豊姫命（オトヨヒメノミコト）」は、トヨに通じるのではないか。「豊秋津姫（トヨアキツヒメ）」は天押穗耳尊（あめのおしほみのみこと）の妻であり、すなわち、海部氏の祖神彦火明命の母君に当たる神格である。ここにも、「トヨ」の音が含まれている。

九世孫の妹の「日女命」は、「日神」とある。「日の神」、これが卑弥呼にあたと考えられる。

倭の女王卑弥呼は太陽神であり、その宗女として一族の祭祀を継ぐのがトヨである。

すなわち、『海部氏勘注系図』に記された九世孫の妹「日女命」が卑弥呼で、十一世孫の妹「日女命」がトヨと考えられる。

二世紀末から三世紀初頭、日本海沿岸で勢力をもっていたのが、海人族による大丹波王国で、卑弥呼はそうした一族に生まれ、大きな勢力のシンボルの存在であったと考えられる。ヤマト政権の基礎を築いた大丹波王国の長、海部氏の系譜上に卑弥呼が存在したのではないかと考える。

一方、これほど有名な卑弥呼とトヨでありながら、『古事記』にも、『日本書紀』にも書かれていない。それは、卑弥呼が海部氏の系譜上の人物となれば、海部氏を排斥したのち、八世紀の大和朝廷が作成した『古事記』『日本書紀』がその表現に躊躇したのもうなづける。卑弥呼とトヨは海部氏の存在とともに消されてしまったのであろう。

#### ▼日女命の系譜の図（表4）

### 3 丹後の遺跡

#### (1) 赤坂今井墳丘墓に眠るのは？弥生時代の墳墓では全国一

赤坂今井墳丘墓（京丹後市峰山町）は、弥生時代終末期の三世紀前半のころの墳墓である。方形墳墓で弥生時代の墳墓としては全国で最大級である。

発掘されたのはその墳墓の中で二番目に大きな埋葬施設であり、出土した副葬品がみごとに勾玉管玉で作られた冠であった。墳墓のまん中にはさらには大きな埋葬施設があるがそれは残念ながら発掘されていない。つまり、それ以上に貴重な出土物がでる可能性は当然ある。

奈良文化財研究所の肥塚隆保氏によれば、この管玉の青色はケイ酸銅バリウムで古代中国の人工顔料「漢青（かんせい・ハンブルー）」で、時期的には紀元前三世紀ほど遡ること、また、中国から、南アジア、東南アジアの方面より海のルートを通じて日本にきているという。管玉のガラス自体も中国産とみられるとのこと、中国の原料を使い、中国で作られたと報じている。

この墳丘墓の中心には、一番大きい第一主体部がある。この一番大きい第一主体部の調査は、まだ行われていないので何がでてくるかわからない。しかし、二番目に大きいものから、これほど立派な副葬品、装飾品が出てきたので、恐らく、それをしのご副葬品が期待できる。この三世紀前半に権力を掌握した人物、しかも、鉄やガラスの生産を行い、富を蓄え、航海力をもった海洋民の丹後の王であろう。卑弥呼とトヨの一族がここには眠っているのではないだろうか。

#### ▼赤坂今井墳墓の写真

#### (2) 大風呂南墳墓の多量の鉄剣とガラス釧

大風呂南（一号墓・二号墓）墳墓群は、弥生時代後期から末期の台状墓である。丹後半島の南にある阿蘇海を臨み、南東方向に派生する丘陵上に築かれている。ここに、五基の埋葬施設があり、一号墓には、二基、二号墓には三基あった。これらのうち、一号墓の第一主体部は、巨大な逆台形の墓穴に、全長四・三メートルに及ぶ巨大な船底形にくりぬいた木棺をおさめていた。そのなかには、朱を塗り、鉄剣が一本、銅釧が十三、貝輪の残欠、ガラス釧、鉄鏃（てつぞく）、などが出土した。ガラス釧は、欠損なく出土したものと、日本初。この時代のガラス製品として、最大級で、外径九・七センチ、内径五・八センチ、厚さ一・八センチ、左手に付けられていたようだ。また、第二主体部からも、鉄剣が二本出土している。

こうした出土物からは、強大な武力があったこと、銅釧と貝輪は北部九州とのつながりを示していること、ガラス釧は高度な技術との交流があったことを示している。

このように、鉄の出土量としては、全体量としては九州が多いが、一つの墓

のなかに、これほどたくさん鉄剣が埋納されているのは、この丹後が一番である。この当時の大和にこれだけの鉄はでていない。つまり、このことからわかることは、弥生後期に、列島のなかで、一番強力な王が存在していたのは、九州でもなく大和でもなく、丹後にいたと考えられる。

### (3) 大田南五号墳の青龍三年鏡は卑弥呼の鏡か

卑弥呼が朝貢し、銅鏡百枚をいただいたのは、景初三年（二三九）ということであるが、大田南五号墳（京丹後市峰山町・弥栄町）からは青龍三年の年号が刻まれた方格規矩四神鏡と呼ばれる鏡が出土している。青龍三年とは、中国の魏の年号で二三年、それは、卑弥呼が遣使する四年前の年号である。これこそ卑弥呼が下賜された銅鏡百枚のうちのひとつではないだろうか。

### (4) 弥生の丹後にはガラスも鉄も絹もあつた

京丹後市峰山町にある扇谷遺跡は、弥生前期末～中期初頭の遺跡で、最大幅六メートル、深さ四メートルというV字形に切り込んだ環濠をもつ高地性集落である。ここからは、鉄滓や陶埴という土笛が出土している。陶埴は、古代中国の楽器で、卵型をした土製の素焼きの笛である。北九州から山口県、島根県、そして丹後地域という日本海側から出土しており、弥生前期後半の遺跡から出土する特徴的なものである。

丹後初の王墓ともいわれるのが与謝野町にある日吉ヶ丘遺跡である。弥生中期、紀元前二世紀から紀元前後くらいに、丹後にすでに王がいたということがいえる。それが王墓といわれるのは、一辺が三十二メートルある広い面積の遺跡のなかで、埋葬されたのが一人であることからである。広さは、吉野ヶ里遺跡につぐ当時としては三番目の大きさで、中からは、碧玉製の管玉や緑色凝灰岩製の管玉などが、六百七十個以上、また、魔除けや、死者の再生を願う呪術のためにまかれたとされる大量な朱がまかれていた。

また、宮津市江尻の難波野遺跡は、弥生時代中期後半、紀元前一世紀ころの方形貼石墓二基を含む遺跡群である。長辺は約三十メートル、短辺は、十六・二メートルで、丹後の弥生噴墓では最大といわれる日吉ヶ丘遺跡と肩を並べるものである。被葬者は、宮津市の府中地区を地盤としていた有力者であろうといわれるが、この遺跡のすぐ近くに丹後一宮籠神社がある。籠神社には、古代からの海人族の系譜が伝えられているが、海に近く、日本海ルートの交易を考える上でもこの弥生の遺跡があることは重要である。

水晶工房跡で、日本最古で最大といわれるのは、京丹後市弥栄町にある奈具岡遺跡である。弥生時代中期後半、一世紀ころと考えられる遺跡で、鍛冶製鉄にかかる渡来系氏族の大規模な鉄技術集団がいたと考えられる。弥生中期、北部九州を凌駕する技術力が丹後に存在していた。

三坂神社墳墓群（京丹後市大宮町）は弥生後期前半、そこには、有力者とその家族三十九人を埋葬しているという。そのなかで最大の三坂神社3号墓には、

水銀朱がまかれており、水晶玉、ガラスの勾玉や管玉で作られたヘアーバンドや耳飾りをした有力者が眠っていた。また、朝鮮半島からもたらされた素環頭鉄刀、鉄製のヤリガンナ、鉄鏃などが出土している。墳墓全体からは、ガラスで作られた勾玉や管玉が三千点以上出土している。

同じころの今市墳墓群（京丹後市大宮町）からは鉄製のヤリガンナと刀子が出土しているが、このヤリガンナには絹糸が巻かれていた。弥生の絹が丹後から出土していることは注目する。

#### 4 近江の遺跡の重要性

##### (1) 熊野本遺跡のガラスと鉄

古代丹波国の同族として連合していたと考えられる国のひとつが、近江である。弥生の近江の遺跡で注目するのは、熊野本遺跡である。

平成一〇年に発掘された熊野本遺跡は、新旭町の西部に広がる饗庭野台地の中央よりやや南よりで、弥生中期後半から後期にかけての土器が出土した高地性集落で、軍事的正確をもった集落といわれる。

緑色凝灰岩の剥片が出土しており、玉づくりが行われていた可能性があり、日本海岸地域との交流の拠点集落だったと考えられる。多数の青色のガラス玉、鉄ぞく、やりがんななどの鉄製品、鉄素材が出土。弥生時代中期後半に日本海岸地域を通じて流入されている。出土した七四一個のガラス玉は、丹後の大風呂古墳から出土したガラス釧と成分が同じ可能性がある。また、副葬品の中には琵琶湖でとれないハマグリがあり、日本海岸との交流が深かったことを表している。

丹後の三坂神社遺跡のガラス玉と大和の唐古鍵遺跡のガラス玉とが同一のもので、ここに、丹後、丹波、山城、大和のクリスタル・ロードがあったと考えられる。考古学の視点からも、日本海岸から近江を経て、内陸部へと移動する日本海ルートが見える。丹後、若狭の日本海岸から、近江の新旭町へ、そこから水路、琵琶湖を船でわたり、守山市栗東市あたりの近江湖南に上陸し、そこに大型建物を建てて、祭祀を執り行ったか。初期ヤマト政権成立前夜、物資や情報の供給ルートのひとつに、勢力をもった海人族により、丹後から近江の琵琶湖を通り、内陸部へとはいったであろう道がみえる。

紀元前一〜二世紀段階では、滋賀県湖西部と若狭あたりは一体であったという評価もあるように、丹後・若狭・近江についてはヤマトへの道筋として、古代往来が深く、海人族がその文化の担い手であったと考えている。

##### (2) 稲部遺跡の3世紀最大の鉄器製造工房跡と祭祀と居住遺跡

彦根市の稲部遺跡は、弥生時代後期中葉から古墳時代前期（二世紀〜四世紀）の遺跡である。ここから、一八〇棟以上の竪穴建物や大型建物、独立棟持柱付建物が二棟見つかった。

鉄器工房は三〇棟以上ある竪穴建物群で、各棟は一辺三・五〜五・三メートルの方形。うち二三棟の床面から鉄片や鉄塊が見つかった。全体の重さは計約六キロに上るといふ。また、鍛冶や鉄を加工する際に使ったと思われる台石や、鉄製矢尻二個なども見つかっている。

また、大規模な大型建物跡は幅一・六メートル、奥行き一六・二メートル。同時期では、奈良県桜井市の纏向遺跡の大型建物跡（幅一九・二メートル、奥行き一二・四メートル）に次ぐ規模という。首長の居館や巨大な倉庫として利用され、他の国との物流拠点だった可能性があるとされている。また、計一二個の桃の種が出土しており、何らかの祭祀が行われていたと考えられる。

この遺跡には、居住空間、祭祀スペース、工房跡の三点が出土し、これは県内初で、近畿でも珍しいという。

稲部遺跡は、まさに卑弥呼の時代に鉄工房のあったところである。邪馬台国大丹波王国説を唱える私のなかで、近江の稲部遺跡の存在は非常に重要である。

### (3) 伊勢遺跡は卑弥呼の母の時代か

近江の遺跡に注目する理由がもう一つある。それは、伊勢遺跡である。

伊勢遺跡は、守山市伊勢町から阿村町に広がる、弥生時代後期（二世紀後半）のもので、約三〇ヘクタールで当時の国内最大級といわれる。さまざまな形式の大型建物が十三棟も確認された。建築様式から伊勢神宮のルーツとも目される貴重なものといわれる。これ程多くの大型建物が見つかったところは他になく、邪馬台国の時代に有力なクニであったと考えられる。居住範囲は、東西七百メートル、南北四百五十メートルと推測される。

近江は、交通と情報の要衝であることがあげられるが、弥生後期においてもそうであるといえる。遺跡からも地形からも重要な位置にある近江、そこにある伊勢遺跡は重要である。この伊勢遺跡からは、神体山といわれる三上山が眼の前に広がる。今も近江富士といわれるこの三上山を拝するように、古代の人々が伊勢遺跡の場所から三上山に祈りをささげていたであろうと思われる。

## 5 卑弥呼の母とは

### (1) 卑弥呼の母はヒボコの系統か

『海部氏勘注系図』の研究から海部氏の「九世孫、日女命」と「十一世孫、日女命」という二つの「日女命」のうち、九世孫の妹の「日女命」は、「日神（ひのかみ）」とあり、これを卑弥呼にあたと比定した。また、十一世孫小登與命の妹の「日女命」をトヨにあたと比定した。（拙著『前ヤマトを創った大丹波王国』p148）。

そうすると、卑弥呼の父は、卑弥呼と目した「九世孫、日女命」の一つ上の代、すなわち父親の代にあたるのは、系図で見ると八世孫の日本得魂命である。



またの名を大稲日命という。

系図のなかに記された「妹」という文字は、兄弟姉妹の妹で血縁を表す。また、系図に現れる女性の名は、祭祀を行った人物など重要な人物である。

『海部氏勘注系図』には、八世孫の倭得玉彦命のところに、「妹 大倭姫命」とあり、「亦名 天豊姫命」「一云う 葛城高領日女命」とある。葛城高領日女命は、ヒボコの系統の多遅摩比多訶と由良度美の子である。葛城高領日女命は息長宿禰王と結婚し、神功皇后を生んでいる。卑弥呼は二世紀後半から三世紀に生きた人物である。『日本書紀』には、詳しい卑弥呼やトヨの活躍は書かれていない。しかし、『日本書紀』は、ちょうどその時代に、神功皇后という女帝の名前を記し、二世紀後半から三世紀初頭に活躍した女性として記述している。そうすることで、いかにも、神功皇后は卑弥呼のことであるように思わせようとした意図が見える。神功皇后は応神天皇の母であるから現実にはいたとしたら四世紀後半であるが、『日本書紀』の年代では三世紀であり、ここで約一二〇年引き伸ばされている。

こうした年代の操作がされてはいるが、『古事記』が示すところによると、「息長宿禰王、葛城之高額比売に娶いて生みませる子、息長帯比売命」とあり、神功皇后の母は葛城之高額比売である。

『日本書紀』

息長宿禰王

— 神功皇后

葛城之高額比売

また、『海部氏勘注系図』の八世孫の倭得玉彦命の子には、「日女命」とあり、これが卑弥呼のことであろうと思考する。

『海部氏勘注系図』

八世孫の倭得玉彦命

— 日女命

(天日矛の子孫) 葛城高領日女命

日女命の母となる葛城高領日女命の祖先は天日矛である。

このように、倭得玉彦命と葛城高領日女命の子が「日女命」＝卑弥呼であるとすれば、卑弥呼は、大丹波王国の海部氏族を父に持ち、大丹波王国の但馬に落ち着いた天日矛系を母に持った卑弥呼であるということになる。

また、『古事記』『日本書紀』によれば、葛城之高額比売の夫は息長宿禰王であり、息長氏は古代近江国坂田郡、今の滋賀県米原市を根拠とした氏族である。米原市の日撫神社に祀られており、米原市の山津照神社古墳の被葬者との説がある。このように近江の豪族である夫を持つ高領日女命は近江にいた可能性があり、卑弥呼の母は近江にいたといえる。

## (2) 卑弥呼の母は近江の谷上刀婢か

また、『先代旧事本紀』には次のようにある。

「八世孫倭得玉彦命 亦是市大稻日命と云ふ 此命は淡海國谷上刀婢（たなかみとべ）を妻と為し一男を生む。伊賀臣祖大伊賀彦の女 大伊賀姫を妻と為し四男を生む。」

「九世孫弟彦命 妹 日女命 次に玉勝山代根古命 次に若都保命 次に置都與會命 次に彦與會命」とある。

これによれば、八世孫の倭得玉彦命と淡海の谷上刀婢が結婚して一男を得たとある。また、大伊賀姫との間に四男がある。九世孫弟彦命のところには、「妹日女命」と「玉勝山代根古命」「若都保命」「置都與會命」「彦與會命」とある。ここに書かれている「妹 日女命」は、倭得玉彦命の子であり、母は淡海の谷上刀婢である可能性がある。

谷上刀婢の「たなかみ」といえば、大津市に田上という地名、長浜市に「木之本田上山」、栗東市に標高599.7メートルの田上山（たなかみやま）がある。近隣の守山市には伊勢遺跡がある。谷上刀婢のいた場所は不明であるが近江の「タナカミ」に関連した地域にいたのではないだろうか。

### (3) 卑弥呼の父は海部氏の倭得玉彦命、卑弥呼の母は近江にいた

『先代旧事本紀』は、物部氏や尾張氏の歴史を綴ったものである。尾張氏と海部氏の系図は大変よく似ている。近江は、大丹波王国の同族がいた場所であり、伊勢遺跡や三上山、また、御上神社には、天之御影命が祀られ海部氏とのかわりが深い。一方、ヤマトへは、早くに海部氏の三世孫倭宿禰命がはいっている。

このように、卑弥呼の父は、大丹波王国の海部氏の倭得玉彦命である。母は、一説に葛城高額日女命で、大丹波王国の但馬の天日矛系の姫であり、夫が息長宿禰王であり、近江にいた可能性がある。

また、一説に卑弥呼の母が淡海の谷上刀婢であるとしたら、ここでも卑弥呼の母は大丹波王国の近江国の姫であるといえる。いずれにしても、卑弥呼の母は、大丹波王国の近江の国にいたと考える。

## 6 古代の風景

丹後半島の位置は、大陸とヤマトの間にあり、ここが古代の弥生後期の先進地であり、近江とは同族で協力関係にあった。全国に分布する海部郷のなかでも、強力な海人族のいた拠点であり、貿易立国で偉大な勢力を誇ったであろうことが、考古学的にも立証される。また、国宝『海部氏系図』からは、強力な水軍があった丹後海人族の存在が浮き彫りにされる。そして、三世孫の倭宿禰命のころには、すでに丹後海人族がヤマトに入っている。丹後にもヤマトにも海人族の拠点があったのであろう。

しかしながら、弥生後期の繁栄はやはり、丹後のほうにあった。さすればここが邪馬台国で、卑弥呼も丹後にいた。

「イリ王朝」といわれる時代があり、大丹波王国（＝丹後王国）の隆盛の時代と一致している。ミマキイリヒコイニエ（崇神天皇）やイクメイリヒコイサチ（垂仁天皇）は、大丹波王国に入り婿したのではないだろうか。

一〇代 崇神天皇                   ミマキイリヒコイニエ

一一代 垂仁天皇                   イクメイリヒコイサチ

ミマキイリヒコイニエ（崇神天皇）やイクメイリヒコイサチ（垂仁天皇）が大丹波王国（＝丹後王国）に入り婿した人物だとしたら、次のような仮説が成立する。

仮説1 崇神は、トヨに入り婿

仮説2 垂仁は、比婆須比売命に入り婿

仮説2は、『古事記』や『日本書紀』でも示されているように、垂仁天皇は、比婆須比売命を皇后に迎えている。そして、その姉妹たちも妃になっていく。これは、母系である比婆須比売命の側に主力があったためと考える。

仮説1のトヨとは、『魏志』倭人伝にでてくる卑弥呼の宗女トヨのことである。このトヨについて、筆者は丹後一宮籠神社の所蔵する国宝『海部氏系図』等の分析からこのトヨが「十一世孫 日女命」に該当し、古代丹波国に関係した人物ではないかとした。そして、さらに、トヨに相当する人物と崇神天皇にみなされる人物が同時代にいると考察した。

卑弥呼の時代からトヨに引き継がれた邪馬台国であったが、引き続き、崇神天皇に引き継がれ、ヤマト政権へと連続していったと考えられる。

ヤマト建国の基礎を作ったのは丹後海人族であり大丹波王国である。各国の王たちに共立されて女王となった卑弥呼は、倭国の女王である。倭国とは、九州までも含む広い範囲と考えるが、その中心的位置を占めるのは、ここに示す大丹波王国であろう。卑弥呼は、海人族の女王、丹後を中心とする大丹波王国（＝丹後王国）の女王である。

卑弥呼の時代を経て、トヨの時代となるなかで、大和でも大きな古墳が築かれていき、古墳時代に入っていく流れのなかで、大和に移ったと考えられる。すなわち、邪馬台国は、前期段階は、海のある丹後を中心とするタニハの国にあり、後期は大和を中心をおき、邪馬台国からヤマト政権へ連続していったと考えられる。

こうした大きな流れを考察するなかで、丹後方面と近江はもとより同族として日本建国の中心的役割を果たしてきたと考えてきたが、それを補強してくれるのが、丹後と近江の弥生中期後期の遺跡である。

『古事記』『日本書紀』及び『海部氏勘注系図』と『先代旧事本紀』の記述及び遺跡の存在から卑弥呼の父を大丹波王国の倭得玉彦命とした。そして、母にあたるのも、近江の人であった可能性について考察した。

大丹波王国の長は古代タニハ国である丹後、丹波、但馬、そして近江を通り

ヤマトへと往来しながら勢力をのばしていた。丹後の海部氏は、応神天皇のとき、若狭木津高向宮で海部直の姓を与えられたが、それまでは偉大なる力をもっていたのである。

その後も、政争に敗れたもの、皇位継承の争いに巻き込まれた貴人たちが丹後に逃れ来て匿われたのであったが、それだけの歴史をもった土地柄であったからであり、ここは簡単には手出しができない聖地だったのである。

(了)